

誘導の動機に関する一考察

——如何にすれば子どもは仕事に興味を示すか——

杉 本 陽 子
河 尻 朋 子
谷 口 喜 久 子

毎日の幼稚園生活の中で、子どもたちは今まで知らなかった新しい場面にゆきあたり、驚きの眼をもって、一つ一つの物事にぶつかりながら、自分の個性を伸ばし、自分と一しよに過してくれるお友だちの存在を知り、遊びにリズムに製作に、楽しい時を過しながら、一瞬も静止することなく成長してゆく。

こうした子どもたちと一しよに過し、その成長を、いつも目の前で見ている私たちは、この子どもたちの発育の芽を上手に伸ばし育てるために、いつも、適当な環境を準備しようと細かい心遣いをしたり、カリキュラムを考えたり、その実行のために、綿密な計画をたてて材料をととのえたり、いろいろと気をつけている。ところが、その反面、その準備や計画が単に理論的なものに流れてはいな

いか、子どもたちの心とへだたててはいないかという配慮こそ必要でありながら、案外なされていけないのではないだろうかという気がする。押しつけられた仕事、興味を失った顔の子どもたち、自分の意思のままに動かない子どもたちを眺めて当惑する先生。それに反して、同じ一つの保育内容を実行に移す場合でも、ちょっととした気のくばり方によって、子どもたちの心の中にひそんでいた意慾をひきだし、生き生きと輝くうれしそうな顔に迎えられると、同じ環境の中にいるとは思えないような暖かさに思いがけない興味ある発展がみられたりする。

では、同じ一つの意図を私たちがもっていてそれを実行に移すとき、なぜ、こんな違いがでてくるのだろうか。その点を考えるとき、

ここに動機づけ、導入の仕方の問題が浮び上がってくるのではないだろうか。机の上でたてられたプランも、かなりの中と気持の余裕をもっていないと、実際の場面にゆきあたり、その日の子どもたちの状態や全体の雰囲気によって、案外もろくろくずれかかるとのであることは私たちの日常経験するところである。

そこで私たちは、教師の意図を実行に移す場合あるいは子どもの活動を発展させる場合に、どのようにして動機づけるか、また、どのような場合により効果がみられるかを、自分たちが日常おこなっている保育の実際の体験の中からとりあげて、もう一度反省する資料とし、また今後の参考にしてゆきたいと思い実行に移した。以下はその記録の一部である。

A 子どもの提案をとりあげた場合

例 1

朝、自由遊びを楽しんでた女の子のグループが走ってきて、「先生レコードかけてちょうだい。」と言うので、「どんなのがいいの。」と尋ねると、「いつかの。」と答える。（運動会の時、おどったものがとても好きなので、それ以後、時々レコードをかけて楽しんでいました。）すぐに、それらのものを選びだし、その他に新しいレコードを加えて準備しておく。子どもたちは待ちどおしいらしく「先生も一しよにおどってね。」などと、まわりでびよんびよんはねながら

言っていたが「レコードをかけたら行きますよ。先に外にでて待っていてちょうだい」とうながすと、勢よく返事をして走りで行った。レコードをかけて拡声器に入れながら窓からのぞくと、もう、きちんと二人づつ手をつないで待っているので、びっくりする。

（結果）

その後、かなりの時間を楽しく踊って過すうちに他の子どもたちも加わり、大きい輪になったり庭中に散らばったりしながら踊った。新しい遊戯の時は先生が先頭になったり中心になったりして、その場で、すぐに一しよに踊ったが、みんな、うれしそうで元気にのびのびとしていて嫌がる子どもはいなかった。

例 2

登園後、遊んでいた子どもうちの数人が「先生、人参やごぼうをつくろう」と言い出したので、昨日の野菜つくりの時の材料を運んできて作り始めた。これを見て飛行機をとばして遊んでいた子どもたちも「僕も作ろう。」と途中で止めて製作に加わる。外で遊んでいた子どもたちも、室の子どもにさそわれたり、自分でのぞきにきて、興味をもったりして、ぼつぼつと中に入ってきて、ほとんど全員が交代に製作を続けていた。

（結果）

予定していたよりも、はるかに早く、たくさんでき上がった。昨日の製作「野菜つくり」に非常に興味をそそられていたので、今日は

子どもたちの方から言いだして続きをしたのだが、「もう片づけましょう。」と言いだした時も、時間がなくなつた為に、止むを得ずきりあげるのであつたせいで、不服の子どももあり「もう帰るのもっと作ろう」とつまらなそうであつた。

例 3

まだ遊びの最中であつたが、十時頃じかに遊戯室へ集める。歌を教えようとしたら「むすんで開いてをして」とA子の発言、皆それに同意を示すので、交代で舞台の上に昇りリーダーになることに決める。途中より「あなたのまね」に変える。

その後で遊戯「山のみなさん」を皆でする。今日始めて教えたのだが、これは皆の好きな曲で、二番まで一度に覚えてしまった。更に二・三の知っている遊戯をしたあと、一男児の希望により「うさぎとかめ」を教える。これは運動会に他の組がしたものである。一人ずつスキップ二回、室に行進で帰る。

(結果)

今日はひさしぶりにしたせいか、集まりが良い。そしていつもあまりしたがらない子どもも集つて来た。むすんで開いてもほとんど子どもがリーダーになり長時間続けられた。更に遊戯もいつも見ていてあまりしないような子ども喜んで参加していた。いつもこのように全員が参加してくれたらと思ふのだが、何しろ今日は落つて良く出来た。

例 4

朝九時四十分頃一昨日何人が作りかけていた菊の花(「何かつくらせて」と言つて来たので「じゃあ散歩で見て来た菊の花をつくりましょう」と数人のやりたい子に作りかけさせてあつた)をB子がしたいと言つて来たので紐、色紙、ひごなどを出してあげる。自分の作つた植木鉢をさがして来て花を作る。葉も茎も付けた物は私が片木の箱の蓋を利用して植木鉢に止めてあげる。子どもたちはそれをぎっかけに入れ代り立ち代り来ては作る。この時動物が作りたいと云う者には動物を作らせる。

(結果)

花を造るのは割合こまかい指先の仕事を要求されるので面倒だつたらしいが比較的長く続き、やつた子どもは何とか完成し、中には何輪も作つた子もいた。

動物も自分で顔など思ひおもいに造つて貼り付けかわいいのを造つてきた。動物と菊の花と両方造つた子もいる。いつも外ばかりで、あまり皆と一しょにしない子ども今日は作っていた。ずいぶん長い間していたらしく、気がついたら十一時半になっていた。それから皆で手伝つて片付けた。

例 5

今日はお天気も良いので外遊びに人気がある。子どもたちが花飛び競走をしたい(運動会にしたもの)と言ひに来る。そこで、部屋

の中にいた子も誘って外へ下りると、「縄を取って来るわね」と言
って子どもが取りに行く。途中で飛び越す縄を持つ子も決り、はじ
める。子どもたちが出発の線より出ないように他の子を並べ、出発
の合図の号令をかける。あわてん坊がいるとやり直し、ちゃんと規
則が定っていた。私が合図をしたり子どもがしたり、縄をとんだり
ぐぐったり、しまいはりレーになる。まりをバトンの代りにし
て、まりの渡し方など（手渡さないで投げたりした場合など）反則
した時はした方が負、両方がした時は引分と決めて始めた。

（結果）

皆思う存分走っている。縄の持ち手も人気があり上手に交代して
いた。約束を破った者は皆の総攻撃にあう。しかしやはり勝ちたい
らしく、何回となく負けた者は次第に離れて行った。最後までリレ
ーをしていた者はよほど面白いらしく、なかなか止めようとしな
かった。今日はお互で決めたルールを良く守り元気に遊べた。また参
加者も多く男女とも楽しくかなり長時間遊んだ。

B 提示によって子どもの興味をひいた場合

例 1

朝、出来上った籠を保育室のピアノ上の、子どもたちに見える場
所に置いておく。登園してきた子どもたちが早速みつめて、「先生、
今日これつくるの。」「いつつくるの。今。」「これお家へ持って帰る

の。」「これ、きれいだね。」などと聞きだしたので、「それじゃ、作
りましようね。」とマイクで、「籠を作りたい人はいらっしやい。」と
外の子どもたちを呼んだ。遊んでいた子どもたちも、籠をみつめて
作りたがっていたので、すぐに入ってきて始める。

（結果）

三人ほどは、ちょっと遊びに夢中で、「作りたくない。」と入って
こなかったもので、しばらく、そのまましておき、ほとんどの子ど
もたちが興味をもって作り始めて後、呼びにいくと、急いで入って
きて全員がそろった。籠を家を持って帰るのも、うれしかったらし
く、楽しそうに製作していた。

例 2

三日前から続けてきている八百屋さんごっこの製作に、子どもた
ちがたいへん興味を示しているので、今日は果物の製作の材料を用
意しておいた。朝、男の子のひとりが職員室に入ってきて「先生今
日は何を作るの。」とたずねるので、「今日は果物をつくったらどう
かしら。」と答えると、「僕今作ってもいい。」と乗気になってきた
ので、紙を渡す。ようすを見ると、すぐに保育室に紙を持って
とんでゆき、「いいな僕、果物作るんだから。」とうれしそうに大声
で言ったので、まわりの子どもたちも、その子のそばに集り、画用
紙を眺めたり、口々に尋ねたりしている。そこで、早速、紙をもっ
て保育室に入って行き、「みんなも作る？」と声をかけると、「作

る。「作りたいたい。」とクレヨンや鋏をだしてきたので一つの机に材料を置き、自由にとってきて作るように準備して始める。

(結果)

出来上った果物から棚の上に順番に並べると、ちょっとお店こっころしい雰囲気が出てきたので、子どもたちはすっかり喜んで次々に作りあげては並べていった。ひとりりが、お野菜もまだ足りない。と言いだし昨日の材料を持ってきて作ったり、お金や財布を作ったりして、ほとんど全員で、だいぶ長い時間を過した。

例 3

ボール箱の中に芯を入れ、ボール紙にふせてひもでとめただけの山の原型を、朝、へやへもって来ておいておく。数人の子どもがやって来て「これ何するの」と聞くので、「さあ、何でしようね」と問い返す。わからならしい。「これね、山にしようと思うのよ」というと、子どもたちはへえとびっくりしたような顔をする。「このままではおかしいけれど、みんなで考えて、紙をはったり色をぬったりすれば、きつときれいな山になるわ」「うん、そうだね」とひとりの男の子がうなずく。「しよう、しよう」と、さっそく用意してあった和紙で下張りが始まる。「疲れたらほかの方とかわってちょうだい」と頼めば交代にくる子どもがある。またたくうちに山らしい形ができあがった。色をぬるといったが、下張りが乾くまで待つようにいう。おそく来た子どもは、ほかの子どもたちから山の

ことを聞き、下張りのできた山を興味深げに眺めている。「何にもないじゃないか」という子どもがある。「そうね、じゃ山に何かがあるかしら。」「木が生えてる」「動物だっているよ」……子どもたちのおしゃべりが始まる。そこで当番の子どもに皆をへやへ集めてもらうよう頼んだ。山のことに全然関心を示さなかった子どもも二、三人いるので、もう一度「秋の山」を作りたいたことを話し、何を作ったらよいか話し合せて、まず皆で木を作ることにした。

(結果)

となり同志むかい同志おしゃべりしながら楽しそうに作っていた。いかにも秋らしい赤や黄色の葉をつけた木、「冬でも緑のはっぱの木があるよ」と緑の葉をつけた木、そのほか柿や栗まで、種々さまざまの木ができあがった。

子どもは朝やってくる和下張りの乾いた山に色をぬってくれる。前日の続きで、子どもたちも山を作ることは興味がついているので、「きのこの続きをしましょう」と誘えば、皆へやに集まってくる。集まったところで「山のともだち」を歌う。この歌は男の子も女の子も大好きで遊びながらでも歌い出すことがあるくらい。歌ったあと、製作の話し合いに入る。「きのこの木を作ってもにぎやかになっただけで、誰もいなくて淋しい。山にももっとお友だちがほしい」というと、「きのこ。おちば」という子どもがある。歌の文句から思いついたらしい。「それもいいわね。それから。」「くま、

うさぎ」……と動物の名前があがる。そこで、秋から冬まで動物を扱った紙芝居をする。そのあと画用紙に動物をかくて切りぬく。

(結果)

皆熱心に作った。子どもたちのなかに紙芝居の絵をまねようとした者が二、三人あったので、紙芝居などしなかつたほうがよかつたかも知れぬと反省する。

(後記)

このあと三日目も引き続きこの製作をした。「山には人もいるね」「それならお家もある」「電車や汽車だつてあるでしょう」「じゃあ僕は汽車とトンネルを作る」……という具合で、子どもたちは次々といろいろな物を作り製作を發展させてくれた。

例 4

先に茶巾寿司のあき箱を、紙粘土で周りを塗っておいたのがすっかり乾いたので、模様付けをさせようと思い、朝、子どもたちが大体登園した頃(九時四十分頃)ポスターカラーを溶いて用意し、机に紙を敷いて置いた。子どもたちがそれを見て「何をするの」と聞きに来たので、私がサンプルに作って置いたのを見せ、「紙粘土を貼った箱が乾いたら模様を書きましょうよ」と誘った。すると、「僕もする」「私もする」と希望者が続出し、各々の箱を探し模様付をさせる。

(結果)

外や部屋で自由遊びをしていた子どもたちも、友だちがしているのを見て、「自分もしたい」と言ってくる。一度に大ぜい出来ないで(六人位まで)待たせておくのに一苦労、模様のように花や人形などを書く者、縞模様や色分けをする者など思いおもいに。底になる所が書きいいせいか底に手の混んだ絵等を書いてしまふ子が多い。これに平行して鬼ごっこ、縄飛、飛行機とぼしの外遊び、おうちごっこなども活潑、一時間ほどして子どももとぎれて来たので片付けかけると、また子どもが来てすると言う、結局十一時頃まで皆が次々と模様付をしていた。

C 楽しいことが目前に控えている場合

例 1

登園してきた子どもたちに「今日は、どんな日か知っている。」と聞くと、「知ってる。七五三だよ。」と口々に答える。そこで、「今日は七五三ですよ。だから、飴のおみやげがあるのよ。」と話すと、「わあ。」と歓声をあげてとびあがる。そこで、「だから、飴を入れる袋を作らなければね。」と言いかけると、もう気の早い子どもたちは、保育室の中を眺めまわして、出来上った袋をみつけ、「ああ、あれだ。」と走って行き、「先生、上手だなあ。」などと話し合っていた。「作りたい人は、クレヨンをだしていらっしやい。」と言い、

袋の紙を渡して製作に入る。

(結果)

後から登園してきた子どもたちも友だちのしているのを見て、一しょに作り、出来た子どもから外にでて遊んでいた。流感の臨時休園の為、しばらく園からはなれていたが、別に、その影響もみられず、熱心に作りあげるものが多かった。

例2

年長組の子どもたちがひと足先に保育室に入り、お店やさんごっここの準備を始めたので、待ち通しくなった年少組でも、子どもたちが「早くしよう。」と言いだした。「他のお友だちも呼んであげましょう。」と答えると、すぐあたりの子どもたちが廊下にて「お店ごっこするから早くいらっしやい。」と誘い、少しの間に全員が保育室にそろった。すぐお店やさんごっこのやり方を話し合い、ひとりひとりの希望を聞いて各店に分れて始める。

(結果)

野菜や果物を製作していた頃から、毎日「いつになったらお店ごっこするの。」と聞いていた子どもたちも昨日の帰りの挨拶の前に「明日はしましうね。」と言われて、今日を楽しみに待っていたらしく、本当にうれしそうに、お店ごっこを楽しんで過した。

例3

今日はたいへん良い秋日和、朝まだ紙粘土を塗った箱に模様を書いていない子が友だちのを見てほしいと言ってきたので、ポスターカラーを溶いてあげる。次々とまだしなかった子が集って来て書く。

今朝隣の組より「遊園地に落葉を拾いに行くがどうですか。」と誘いを受けていた。箱の絵付が一段落したので付近にいた子どもたちに「今日はお天気がいいから遊園地に散歩に行きましょうか。そして落葉やドングリを拾って来ましょうか」と話す。すると子どもたちは「散歩に行くのよ」と大声でふれ廻っている。部屋の中を片付けながらちょっと庭の方を見ると、子どもたちは帽子をかぶり行く用意をして並んでいる。遊んでいた子どもたちも片付けて次々と飛込んで来ては手を洗って並んでいる。出がけに念の為お手洗に行ってくるよう注意するともう行ってきたとの返事、何と手廻しの良いこと。

(結果)

部屋を片付けたり落葉を入れる籠や袋を用意したりしている間二十分あまり、いつもならブランコに乗ったりふざけっこをしてしまっているところを、何と、列はいくらか曲っても、ちゃんと並んで、いつでも出かけられるようにして待っていた。落葉やドングリを集めたり土手を転ったり登ったり階段を上ったり下りたり皆大喜びでこの間一時間半あまり、喧嘩もなく愉快に過した。途中バラ園のお手洗を借りたがこれもきちんと使うことが出来た。

帰ってからお弁当、この準備も超スピードでおこなわれたが抜けていたものは何もなかったように思っている。

(後記)

この散歩の落葉拾いがきつかけで、子どもたちが自分の家の方で拾った落葉を「先生はい」と持って来てくれたので、大部いろいろな落葉がたまった。そこでこれを使ってグループ別による協同製作で絵をかかせた(作らせた)。絵の内容は指定しなかったが、木や木から葉の散っているのが多かったが中には模様のようにした組もあった。

D 子どもの好きなものを選んで気分転換をさせた場合

例1

お弁当が終わったあとの自由遊びの時、ひとりの男の子が、どこから持ち出したのか身の丈ほどの竹の棒をふりかぶって、逃げる子どもを面白そうに追いまわしたり、英雄気取りで何やら氣勢を上げたりしている。男の子の中には、それに対抗するつもりなのか棒ぎれを拾ってきてからかい半分に向かってゆく者がある。放っておくとけんかになりかねないので、何か精力の転換をと思い、子どもたちの好きなかけっこでもさせてみよう、運動会の時に使った旗や障害物のゴムひもを持ってきて、「みんなでかけっこをしない」とそ

ばにいた二、三人を誘った。すぐに十人ほど集まった。棒をもっていた子どもとんできて僕も入れてと目をかがやかせている。その子どもも含め集まった子ども全部に、棒をふりまわすような危いことは絶対にしないようにと約束し、「もし、かけっこしたくなったら、いつでも旗やゴムひもを貸してあげましょう」といっておく。棒を持ち出した子どもには、もとへもどしておくように注意する。

(結果)

始めの二・三度私が審判をした。そのうちに審判をしてあげるよといってきた子どもがあつたのでかわってもららう。審判のほかに走る人、旗をもつ人、輪ゴムをもつ人が何人かきまっておよそ二十分ほど続いた。この間、けんかは全く見られなかった。

例2

午前中、遊びが何となく荒れ気味で、ころんだり、ぶつかったり、小さなげがをする子どもが、ぼつぼつ出てきたので、お弁当の後、何かに気持を転換させたいと思い、子どもたちの好きな紙芝居をすることにし、自由遊びを少し早目にきりあげて、保育室にいた子どもたちに、「紙芝居をしますから、他のお友だちも呼んできてね。」と頼むと、喜んで、すぐ呼びに行き、たちまち全員が集まった。年長組の子どもたちも、のぞきにきたので、椅子をもっていらっしやいと言ひ、お互いにゆすり合って席をきめる。

(結果)

紙芝居は子どもたちの大好きな「ピーターパン」だったので、非常に喜んで目を輝かせて見ていた。

E その他

子どもたちをへやに集める。二学期になってから紙芝居を作って見せて下さった方が何人かあるし、それからこの間三匠の熊の紙芝居をみんなで一枚ずつかいて作ったときもとても上手にできたから、今度は一人一枚ではなく、今いっしょに坐っているお友だち同志お手伝いし合って、五人で一枚にかいてみましょうという。五人一グループの共同製作は今までに二、三度しているので、五人で一枚の絵をかくことの意味はわかったようだ。どの場面を絵にするかは私があらかじめきめておいた。順を追って七つの場面を説明し、どのグループがどの場面をかくか、かきたいと思うものに手をあげてもらおう。表紙をかきたいというグループが絶対に多い。表紙ばかりできても仕方がないので、どなたかほかの場面にかわって下さらないかと頼んだがゆずるグループがない。「それでは先生がどのグループはどのところをかくか定めてもいい」と聞くと、一斉に「いやいや」と叫ぶ。群衆心理も手伝っているらしいので、しばらくそのまましておいた。そのうちに「先生がきめてもいいよねえ」と話し合っているグループが出てきた。ふざけ半分に「いやいや」と叫んでいる子どももまだあったが、少しおさまったところで

「みんながいやだといっていたら、いつまでたっても紙芝居ができないから机に番号をつけて一の机の人は一番始めの表紙をかき、二番目の机のひとは二番目のところをかきましょう」ときめておき、「わからないことがあったり、かきにくいところができたら、いつでも先生がお手伝いにくわ」といっておいた。つまらないのとまだ不平が絶えなかったが、一人かき始め、二人かきそのうちにグループで相談がまとまったらしく、ようやく静かになった。

(結果)

十分ほどかかって熱心にかいた。終りごろになって、五人のうち二人ほどぬけてしまったグループが二つあったが、そのほかは、できあがるまで五人がよく協力していた。

「ま と め」

ここにあげた例は、先にものべたように毎日の保育の中から、一応効果の認められたと思われるものを選んだのであって、動機の点からみて、便宜上、大体同じようなグループを選んで分類してみた。すなわちAグループは何らかの形で子どもたちの方から、何かに興味を感じて、させてほしいと要求したものをとりあげて発表させたものであり、Bにあげたものは、教師が子どもたちに経験させたら望ましいと思って計画した内容をそのまま押しつけないで提示

するという形をとることによって、子どもたちの興味をこちらの意図にひきつけてゆき、子どもたちが自分の方からやりたいと思ったのと同じような気持を起させたいと望んだものである。次にCの例は子どもたちみんなにとって楽しい行事やうれしいことが目前に控えている場合であり、Dにあげたものは、日常の観察、経験から、子どもたちの好きなものを幾つか準備して、自分の転換にうまく利用していつて成功した例である。Eは、これらのいずれとも違い、子どもたちが最初あまり関心を示さなかったものに対して無理に押しつけることなく、ある時間をおくことによって、子どもの興味を幾分そちらに動き始めた時をとらえて、子どもたちの納得する方へもっていったものである。これらを見てみると、

第一に、ある仕事（遊び）から次の仕事（遊び）へ移る場合、子どもたちの興味の方向を把握して、それを中心にしながら発展させていったとき、効果があげられるのではないか。ということが言える。（例えばAの場合は誘導の動機を子どもの発言をとりあげることによっているし、Bの場合は教師の側から示されたものでありながら、子どもたちの心には、自分の好きなものをするのだという動機づけがなされている。）

第二に、その子どもの興味は自然に示されるのを待つばかりでなく、やはり好ましいものへの関心を持てるような環境をととのえておくことが必要であるという点になると思われる。（B、C、の例より）

第三に、子どもたちは、いつも自由にほっておけばよいというのではなくて、その生活を細かに観察することによって、その場面場面により、どのような方向にもっていったらよいかを判断し、適当に自分の転換をしてゆくことも効果をあげるのに役立つのではないだろうか。（Dの例）。

第四に、教師が意図する方向へもってゆきたいと思ったとき、それをいかにして実行に移すかの技術の研究が常になされていなければいけないと反省された。

第五に、かなり余裕のある保育案をしかりたてておくことも大切であろう。その日の状態を考慮することなしに今日はこれをしなければいけないという気持ばかりで強引に押しつけてゆくことは、かえって効果を削減するように思われた。

もちろん、ここにあげたものは毎日の保育から考えれば、ほんの一例にすぎないので、この他にも地域により、また保育形態により、それらを含めた環境の相違によって、いろいろと違った例があると思うが、日々の保育の中で、あまりにも近すぎるために、とかく何ということもない繰り返しに終ったり、経験上だけの判断に頼ったりしがちな問題であるだけに、とりだしてみることに、よって、いささかなりと反省の資料ともなり今後の方向づけともなったように思う。

（杉本陽子・牛込成城幼稚園）
（河尻朋子・谷口喜久子・東横学園二子幼稚園）